慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラッセルの思想とウキリアム・ジームス（三、完）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.10 (1920. 10) ,p.1482(144)- 1495(157)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201001-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リトアニア……共產黨
メキシコ……共產黨
ノールウエ……勞働黨
ペルシヤ……共產黨
ポーランド……共產黨
ルーマニア……共產黨（前社會民主黨）
ロシア……共產黨（前多數派社會民主主義勞働黨）
南亞……國際社會主義者同盟
スウエーデン……左派社會黨
トルキスタン……共產黨
ヴクライナ……共產黨
合衆國……社會主義勞働黨、共產黨、共產主義勞働黨）

斯樣な經路を經て成立した第三インタアナシヨナルが幾何の壽命を保持するかは一にロシア勞農共和國の共產主義の成功、不成功に掛つてゐると云つていいだらう。其の命數のことは兎に角第三インタアナショナルの出現は社會主義運動史においても、また社會主義學說史上においても重要な出來事であつて、吾々社會思想を研究する者の觀過し得ない所である。今や第三インタアナショナルの中心思想である勞働階級の專制は社會主義學者の論爭の中心點である。勞働階級の專制を主張するLenin と反對の立場にある Kautsky との論戰が社會思想家の注目の焦點になつてゐることに見てもこの新運動の社會主義史上に占むべき地位は明かであらう。

（千九百二十年九月十六日稿了）

ラッセルの思想とウヰリアム・ジームス（三、完）

奥井復太郎

六

『人類は他の下等動物に比して生得の本能並びに衝動を有する事其の種類遙に少なきを以て彼等と區別し得可しと爲すは屢〻唱へらるゝ所なれ共其は一の大なる誤なり。勿論人類は或種の關節動物の有する驚嘆す可き產卵の本能を有せずとするも若し吾人が人類と哺乳類とを比較せんか吾人は人類が如何なる他の哺乳類に比するも遙かに多くの事物の存在に依て在右せられ易く然も此等の事物に對する其反動も著しく特殊的にして且つ既定的なるを認めざるを得ず。猿類殊に類人猿のみが彼等の分析的好奇心及び摸倣性の廣汎なるに於て人類に追從するを得る唯一の動物たり。眞に人類の本能的衝動はその秀れたる推理的能力に依る二次的反作用に因て覆はるゝとは言へ斯くして人類は單に本能的行動の形體を失ふに止まり本能の生活は唯彼等の內部に於て他の形體に假託するのみにて決して消滅したるに非ず。而して屢〻羸弱性及び瘋癲性に於て發するが如く高等なる頭腦の職能の中絕せる時に在りては彼等の本能は往々實に野生獸と等しき方法に於て其の存在を表すもの也。』（W. James: Talks To Teachers On Psychology: and etc. pp. 43-44）

ジェームスの斯かる考察は既に吾人が前稿に於て一言せし處にして『人は先づ實際的動物也』とする彼の思想は人類に於ける理性の發展を說ける彼の記述の中に明なり。

『人類は漸次進化によつて下等より高等に移り行ける下等動物を其の祖先として進化したるものにして此等の祖先に在りては純然たる理知は殆ど存する事なく、又其の精神と稱す可きものが何等かの職能を備へたりとせば、そは優種をして壞滅を免れしめんが爲めに外界より受くる印象に彼等の行動を適合せしむる一個の器官たりしならん。當初に於て意識は生物學的に完全なる一形體に於ける附加的一物に過ぎざりしものの如く夫が若し効益ある行爲に導くに非ざ

れは益なき存在たる可く、此點は以上の考察を離れては理解するを得ざる可し。』(Ibid. pp. 23-24) かくて『人は他に如何なる存在を示すと雖も元來は一個の實際的存在にして彼の精神は此の世界に於ける彼の適合を助けんが爲めに與へられたるもの也。』と。(Ibid. 25)

而して斯かる生得的、本能的、衝動的運動より發して其が理性的知的又は高等なる心的活動と稱せらるゝに至る過程はジェームスが本能の推移の法則 laws of transitoriness によつて、明かにするを得可し。(cp. Ibid. pp. 60-61. Principles of Psychology, vol. I, chap. IV p. 104: vol. II. chap. XXIV pp. 394-402)

吾人の衝動的傾向の多くは或一定の期間に於て圓熟す而して適當なる對象の存在するや彼等に對する行爲は習慣となつて獲得せられ其は以後繼續せらるゝに至る可く之に反して此等の對象にして存せざる場合には衝動は一の習慣を構成するに先ちて絶滅し去り斯くて爾後生物をして此等の傾向に從て適當なる反應を敎へんとするも頗る難しとせざる可からず。かくて

『吾人が外的見地より生物を觀察する時吾人をして強く感ぜしむる第一の事實は彼等が習慣の群束なる事也。野生動物に於ては日々の行動の一般は出生と共に既に扶植せられたる必然の如く、飼畜せられたる動物殊に人類にあつては其は大部分敎育の結果たるの觀あり。爰に生得の傾向ある慣習を稱して本能と云ひ、敎育による此等は多くの人によつて理性的行爲と稱せらる。』(Principles of Psychology. vol. I. p. 104)

而してジェームスは此の本能の推移の當然の結論として主張して曰く『最も多くの本能は習慣を發生せしめんが爲めに附與せられたるものにして、一度此の目的にして成るや本能としての其れ自體は心理的經濟に於て存在の理由を失ひ從て消滅し去るに至る。』(Ibid. p. 402)

斯くて習慣は本能的行爲に代て生物の生活を支配する一大勢力となるなり。『總て吾人の生命が一定の形式を具ふる限り其の生命は吾人の禍福に對して組織的に構成せられ、吾人の運命の如何を問はず之に向つて吾人を推進して許さゞる實際的情緒的及び知的習慣の一括に外ならず。』(Talks to Teachers: etc. p. 64) 然も斯の如き習慣は吾人が肉體を有するの事實より結果せる一の物質的法則に基くものにて『吾人の神經組織の有機的物質の可塑性を有するは吾人が一の事物を爲すに當て最初は甚しく困難を感ずと雖も漸を以て益々容易に之を行ひ得て遂に充分なる常習と共に恰も機械的又は殆ど意識を經る事なくして行ひ得るに至るを說明するもの也。

Carpenter 氏の言葉によれば吾人の神經組織は、一葉の紙又は一着の衣類の一度皺になり又は褶析せられたる後は常に同一の褶曲を反復すると等しく、その作用する狀態に成形せんとするもの也。』(Ibid. p. 65)(cf. Principles of Psychology. vol. I. chap. IV. Habit, pp. 105: 110-112. The Text Book of Psychology. p. 149)

二次的性能或は又 Wellington 公によつて更に大なる意義を附與せられたる習慣はかくて倫理的又は社會的意義を有するに至る可し。吾人は爰に習慣と意志自由並びに其の責任の所在に就ての考察 (cf. Principles of Psychology. vol. I. pp. 117-120.) は是れを避けジェームスの所謂習慣の原則の倫理的及び敎育學的意義の一端について述べんと欲す。

『かくて習慣は社會の一大節動輪にして然も其最も重んず可き保守的勢力也。唯習慣によつてのみ吾人は訓令の束縛の中に閉固され、富裕

の子弟は貧窮の猜疑的暴動より保護せらる。又之によつてのみ生活の如何に困難を極め且つ最も嫌厭す可き行路も之を歩む運命を有せる人々に依て擲棄せらるゝを見ず。其は漁夫及び舟乘りをして嚴冬に至るも海に在らしめ、鑛夫をしては彼の暗黑裡に止め、農夫をしては風雪の全歲月も彼の粗末なる陋屋及び寂莫たる農場に留めしむ。其は砂漠氷雪の地帶の土俗の侵略を免かれしめて吾人を護り或は吾人をしてその養育せられ又は初めに撰擇せし所に從て生の戰鬪を持續するの運命並びに自己に適せる他の職業なきか或は之れに改め得るの機會を失して遲きに至りたる理由によつて不過の職業の奴隷たるの運命を甘受せしむ。そは又異りたる社會の階層を保全して其の混同を避けんとす ...』(Principles of Psychology. vol. I. p. 121)

然れ共斯の如き習慣の勢力も之れを改變するを得ざる頑牢の性質には非ざる可し。蓋し『習慣は神經中樞を經過する通路の構成に依るもの』にして此等の通路は即ち『吾人の肉體を構成せる有機的物質の可塑性に基き』然も『有機物に於ける構成的變化の轉移は無生物に於けるよりも更に迅速なるものある』が故に、且つ其の可塑性たるや『一勢力によつて影響せらるゝの弱さと然も其の勢力に依て直に全く瓦解するに至らざる強さを有する一組織の所有を意味す』るものなるが故に習慣の變改は之を承認するを得可し。(cf. Text Book of Psychology. pp. 134-135: 137-138.)

習慣に關する事實中猶更に重大なる意義あるはジェームスがかの Rousseau を嗤へる所にして『力なき感傷主義者にして夢想家の徒に其の生命を敏感と情緒の漂漾たる海に漂はし何等男性的具體的行動を爲さゞる彼の性格の如く人間の資質として此程怯懦なるは非ざる可し。彼の雄辯を以て佛蘭西の母性を唆かし「自然」に從ふて彼等の子女を成るか儘に養育せよと唱へたる Rousseau か然も自らの子女を foundling hospital に送りしは余が意味する所の顯著なる例證なり。然もルッソーと等しく吾人が抽象的に成案せられし「善」を渴仰し同一の「善」が化體して匿くるゝ多くの醜き個々の事物の間に於ける事實の存在の無知を裝はんとするは何れもルッソーの歩める道を進む者なり。あらゆる「善」は此の勞苦に充てる世界に於ては彼等に隨伴するものの卑俗なるによつては何れも化體せらるとは雖もその「善」を純然たる且つ抽象的形式に於て思考する時にのみ彼等を認覺するを得る者に至ては洵に嘆す可し。』過度に小說演劇に耽溺し徒に感傷的情緒の興奮を唆り、然も現實に於ける事實其のものに對しては全然無知を伴はる。

かくて『人は常に何等行爲に發する事なき感情の發生を以て充され軈て遲鈍なる感傷的狀態の停留するに至る。之れに對する救濟は如何なる感情も何等かの實際的形體に表はれざるが如きは之れを生せしめざるにあり。....よし其表現は世界に於ける最微のものたらしむるも其の發生を失はしむる勿れ。』(Principles of Psychology vol. I. pp. 125-126)若し吾人が屢〻一の努力を逃避せんとするに於ては努力せんとする能力は遂に失はるゝに至る可く又若し吾人の注意力の放散を許容するに於てはその注意力は軈て始終放散の狀態に陷るに至らん。かくて一能力の缺除は其の能力の始めより存在せざるに因るに非ずして寧ろ其の能力の潛在的存在が遂に發現の機會を失づて徒に消滅し去るに起因するもの也。此原則は習慣の法則が物質的法則なる事實による當然の歸着にして即ち能力の存在及び其の活

動の鋭敏を保證せんには吾人は其の能力の發現に充分なる機會を附與せざる可からず。ラッセルが意志を區別して內的意志と外的意志となし外的意志は外部の障害の存在に依つて之れに對して生じ屢〻强烈なる衝動又は願望の表現となり生氣に富める生命には常に存在する所且つ常に困難なる企圖を成功せしむるに必要なるものなれ共內的意志は單に內部に於ける慾望又は願求の撞著する時にのみ必要也。從て完全なる調和的性質はかゝる內的意志の存在を必要とせざれども、其は中心的目的を有し然も之が相反せる衝動と共に並存せる場合にはその首要目的に到達せん事を欲する人々にとつては常に必要なる可し。然もラッセルの唱ふるが如き强き衝動の自由なる發展を許容する社會組織に於てはかゝる內的意志を必要とするの機會は減少せられざる可からず。蓋內的意志によつて抑壓せられたる衝動の强く且重要なるものなる時は以て生命にとつて欠く可からざる有用なる能力を減少するに至らん。『禁止に充てる生命は恐く潑溂たるを得可からざる可く寧ろ放慢にして且つ無味なる生命とならむ。』（cf. B. Russell; Principles of Social Reconstruction pp. 237-239）以て彼の思想又ジェームスの其れと相似たるを知る可し。

『心的狀態の生理學的研究は斯くして道學的倫理の最も有力なる提携者たり、神學の唱ふる死後に構へられたる地獄も吾人が習慣に依て自己の性格を誤れる形體に作れるに依て此の世界に自から設けたる地獄に勝りて恐ろしきものには非ず。若き者をして如何に容易に彼等が單なる步行せる習慣の集體となるやを理解せしめなば彼等は自己の可塑的狀態に於ける內にその行動に多くの注意を拂ふ可く、善と惡とを問はす吾人は自ら自己の運命を紡げる者にして之は又再び改むるを得さる也。』（Principles of Psychology. vol. I. p. 127）

かくて吾人はかゝるジェームスの思想より發して更に其の人生觀を窺はんと欲す。

七

William James が人類の本能に關して述べたる所は改造論の妄想的計畫を一嘲に附し去らんとするが如し然も彼が人生觀は更に此の念を强からしむるもの也。What makes a Life significant? と題せる一講に闡明せられたる彼の思想は人生の奮爭を承認する健氣なる眞勇主義也。（cf. Talks on Psychology and Life's Ideals Part II. Talks To Students. III pp. 263-301）

ジェームスは Chautauqua 湖畔に於ける著明なる Assembly Grounds（一八七四年八月紐育州同名の湖畔に於て催されたる宗教的會合、後に一般の知識的會合となり社會理想實現の試みたり。）に送りたる樂しき一週間を回想し、謹嚴勤勉聰智、善美秩序理想繁榮並びに欣快の德性普ねく『醱酵性の疾患なく貧困なく爛醉なく犯罪なく警察なく人は敎養あり懇篤簡素且つ平等にして人類が幾世紀の間文明の名の下に戰ひ、惱み、力め來りたる最善の美果を有し人類社會があらゆる光明に浴し煩惱なく闇黑なき時代となりし狀態の先嘗たるなり。』（Ibid. pp. 269-270）然るに罪惡なき犧牲なく汚濁なく悲哀なくあらゆるもの蠱惑と安逸により又此の中產的樂園によつて魅呪せられたるジェームスが再び暗黑にして邪惡なる此の世界に現はれたる瞬間に感じたる「救はれたる感」は彼をして『余をして再びあらゆる罪惡と煩惱とを有せる大なる此の現世の荒野にあるの機會を得せしめよ。其處には高きあり深きあり絕壁あり險岨なる理想あり、莊嚴にして無窮なる事物の輝あり。あらゆる凡

常に死せるが如き平面と眞髓とに於けるよりも、更に幾多の希望と力とは爰に存する也。』(Ibid. 270-271)と叫ばしめしは文明が一面只管に安穩と秩序と知智と仁愛とを求め望み來たりしに、尙、是等を完備せる理想鄕に對する人間の本能的不滿を語らんとするもの也。

而してかゝる理想鄕に對する不滿の原因は此の邪惡なる現世に凡ての道德的體形を備へしめ其の間の生活に意義並びに藝術的美を附與する要素即ち力と奮鬪と熱烈と、危險との所謂險難の要素を缺くが故なり。

『生命を眺むる者を激奮し感動せしむるもの、ローマンス及び彫像の稱揚し又物凄き都市の紀念碑の吾人に追憶せしむるものは、何れも暗黑の力に對する光明の力の休みなき戰鬪也。迫られたる機會に及んで勇氣を以て時々死の頤より勝利を攫取する也。然るに彼の云ひ甲斐なき可き戰鬪の跡全く無く『かの死に面接したる瞬間に於ける人間の資質の缺除は Chautauqua の生活の凡庸と妙味の缺乏との充分なる說明たる可し。』(Ibid. pp. 271-273)

かくて眞勇主義並びに困難に抗爭せる勇ましき人生の光景を望みつゝウヰリアム・ジェームスは積極的力行論を唱へたり。

『東洋的思想論者並びに悲觀論者をして彼等の欲する所を云はしめよ。人生に於て最も深奧なる或は少なくとも他に比してより深奧なる意義を有する事實は「進步」てふ性質なる可く或は又一瞬間より他の瞬間に亘つて間斷なく連續的に存在する常に新奇なる理想と現實の微妙なる結合なる可し。』(Ibid. p. 294)即ちかゝる人生の內的意義は內的喜悅勇氣及び忍耐の德性が一個の理想と結合する場合に於てのみ完全に且つ吾人に對する力を有するを得る也。(Ibid. p. 291)

八

然れ共各個人の理想たるや個々の境遇及び其の性能によつて各々異るものなれはかのラッセルが個性の發達は靈妙なる直觀と想像と尙敬とによつて僅に外部より窺知し得るのみと云へるに等しくジェームスも事物の價値に就ては個々の主觀的評價を重ぜんとするもの也。ジェームスが前揭の書の一講 On a Certain Blindness in Human Beings に於て人は外部即ち他の人々並びに彼等の內的生命に對しては如何に無知なるやを示せり。

『事物の價値に關する吾人の批判は其の價値の大小を問はず之等事物が吾人の中に生ぜしめし感情によるもの也。吾人が一事物の價値をその事物に就て形成せる觀念に依て批判するもの也とする場合の如きも之は唯觀念そのものが既に一の感情と連結せるものなるが故也。若し吾

人が全く無感情なるか或は又觀念が吾人の精神の容るゝ唯一の事物也とせば吾人は直に凡ての嗜好と嫌厭とを失ひ生活中の一狀態又は一經驗は之れを他と比較してより多くの價値又は意義を有せりと指示するを得ざる可し。』(Ibid. p. 229)

而して自己以外の生物及び人々の有する感情に對して無知なる事は何人も免れざる所にして『吾人は何れも制限せられたる職能と義務とを遂行する實際的存在なり。個人は自己の義務の意義並びに是等の義務の依つて發生する狀態の意義を痛切に感ずるものなれ共此の種の感情は個々の吾人に存する一個の缺く可からざる秘密にして此の秘密に對する同感を他に求むるもそは徒爾に過ぎず。蓋し他の者は彼等自身の缺く可からざる秘密に自己の全部を專らにするが故に吾人の秘密に何等興味を有する能はず。かくて吾人の批判が他の生活の意義に關するやそは愚味にして不公正なり、吾人の評論が他の人々の狀態又は理想の價値に就て絕對的に其の決定を與へんとするや其は虛誕に走るもの也。』(Ibid. pp. 229-230)

かくて觀察者の斷定は事相の根源を失ふ事確實にして眞理を有せざる事必せり。之に反して批判せらるゝ主體は批判せんとする觀察者が認むるをを得ざる現實の世界の一部をも知るものにして後者が多くを知らざる間に前者は遙かに多くを知る者なり。かくて意見の衝突觀察の相違の存する場合に於ては吾人は常に眞理に近き者は事實について最も多くを感知する者にして決して感ずる事の少なき者に非ざるを信ず可き也。』(Ibid. p. 231)

ウヰリアム・ジェームスは北カロリナ州の山中に於ける開拓者の生活の荒寥にして殺風景なるを述べて後『余は直に此等の狀態が有するその內的意義を認め得ざりし事を感せり。蓋し余にとつては此等の開拓は單に自然を剝奪するの外何ものも語らざるが故に自から此等の開拓に從事せる不屈の腕と順從なる斧鉞との所有者にとつても此等の光景は他の歷史を語るを得ざるものと思惟せり。然れ共彼等が此憎惡なる切株を眺むる時彼等の思考する所は彼等の勝利の實感なり。散亂たる木片、幹を傷けられたる樹木粗雜なる木片の垣圍は何れも忠實なる努力と不撓なる勞苦並に最後の報酬を語る。彼等の茅舍も彼等並びにその妻子にとつては安全の保證なり。要するに余にとつては網膜に映じたる一の醜惡なる繪畫に過ぎざる此の開墾も彼等にとつては道義的記憶を有せる懷舊的表徵にして義務と奮鬪と成功との凱歌を奏せるもの也。彼等が恐らくは吾人の理想について盲目たる可きと等しく余は彼等の生活の有する特殊の理想に對して全く無知なり也』(Ibid. pp. 233-234) されば人の營む生活の形體の如何を問ふ事なく『如何なる生活も之れを營む者に熱誠の精神を生ぜしむる場合にはそは眞に意義ある生命となる可し。時に從ふてかゝる熱誠は屢、肉體的行爲慾と結び或は又認識慾又は想像慾或は回想的思考熱と結合するありと雖もその現はるゝ所常に現實そのものに妙味熱血並びに興奮を附與す。かくて茲に眞正の意義存す可く然もかゝる意味に於ける人生の意義は到る處に見出さるゝを得し。』(Ibid. p. 234)

かの詩人哲人瞑想家の生活に見るが如き放漫なる生活の一形式は一般に商業的價値の標準より秤量する時は一の無爲の生活ならむも自から斯の如き生活に貴重なる意義を生ぜしむ可き他の價値批判の標準あるを忘却する能はず。宇宙

のあらゆる存在現象に滿悅の感情を向け爰に無量の意義を認めんとせし十九世紀北米の詩人生活と天空に輝ける星を仰いで之を一嘲に附したる同世紀の蘇格蘭の思想家の生活との間に存する差異は如何ともす可からずとするも、喜悅せる自己を感じて幸福を望まんとする時は Whitman の世界は Carlyle の世界に比して此の目的の爲めに遙かに幸多く且實現の望み多きものと云ふを得可し。』(cf. B. Russell. Principles of Social Reconstruction. p. 36. W. James: Talks to Teacher on Psychology: etc. p. 253) 同一の現實同一の宇宙がかくも相反せる印象を與ふる所以はジェームスが主張せるが如く意識の個性化即同一の物體も各個々の意識に上るや樣々の形體を以て表はるゝに至るによるものと云はざる可からず。されば吾人は、

『自己以外の他の存在の形體が無意義なるの主張を敢てするを得ざる可く、又此等の生活が吾人にとつて如何に理解し易しとするもそを彼等獨自の見地に於て而も何等他に危害を及す事なくして享樂せる人々は之を默容し尊敬し且つ放任す可きもの也。近付くをやめよ。如何に一觀察者が自己の存せる特殊の地位によつて觀察の特殊的卓越を有す可しとは云へ眞理又は「善」の全部は決して一觀察者に啓示せらる可きものに非ず牢獄又は病院と雖もそれ等特有の示現を有す可く、かくて吾人は大なる世界に存する他に對する容喙を考ふる事なくして各々自己の機會に對して忠實に且つ自己の祝福に就てのみ努力す可き也。』(Ibid. p. 264)

九

以上ウヰリアム・ジェームスの思想の一端に就て考究せる吾人は彼の思想がベルトランド・ラッセルのそれと甚しく類似の點あるを認めざるを得ず。殊にラッセルがミレンニウムの實現を企畫する社會改造論に反對を唱へたる所は恰もジェームスが Chautauqua 湖畔の企畫に對して不滿を表はせると共に空想的改造論に對する一の不信として吾人の見逃す能はざる所なり。而も『Chautauqua の空氣より逃れ來りし瞬間に於て彼にとつて罪惡に充つると雖も又悅びに滿ち充てる感ありし此の全世界も聽ては一大規模の單なる Chautauqua Assembly に化せんとする理想に益〻進みつゝあり』(Ibid. p. 273) とするジェームスの言葉は正に知言と云ふを得可きか。苦痛の極致は遂に吾人を驅つて苦の絕無を冀はしめ勞働の苦惱は勞働者をして屢〻全く勞働より釋放せられたる自由の日を翹望するに至らしめたり。然れ共吾人は勞働は生理的必要なりと云へるクロポトキンの言を信ずるが故に勞働の快樂は勞働狀態の改善に恃つ所あらむも如何に樂しき勞働も終局は多少の苦痛を伴ふ可く、かくて勞働快樂の理想は勞働者自身の勞働に對する內的態度の醇化に之れを求めざる可からず。ラッセルが創造的衝動による社會改造を主張するも正に此の原理に基けるものと云ふを得可し。ジェームスも等しく個人的內容の改善を唱ふるものなるは如上の所論によつても明かなる可く若し社會的外圍の改革境遇の改善を以て現代の改造運動の唯一の主眼と解するに於てはジェームスの思想の意義自から減ぜざる可からず。吾人は今茲に其の當否を研究するの餘地を有せず。唯ウヰリアム・ジェームスの思想の一端を紹介するに止まるのみ。（完）

（九、九、一四）